

山本拙郎的住宅観空想

— 『住宅』および『和洋設備設計の知識』と旧渡邊甚吉邸 実測・解体調査との比較を通して—

2019.2.1 (金) 建築史系修士論文発表

中谷礼仁研究室 住生活記録ゼミ 修士2年 宮原秀明

目次

第1章 序論

- 第1節 研究背景
 - 第1項 発見から保存の経緯
 - 第2項 本論文執筆経緯
- 第2節 研究対象に関する先行研究
 - 第1項 あめりか屋に関する既往研究
 - 第2項 山本拙郎に関する既往研究
 - 第3項 旧渡邊甚吉邸に関する史的既述について
 - 第4項 旧渡邊甚吉邸に関する既往研究
- 第3節 研究目的
- 第4節 研究方法
- 第5節 小結

第2章 旧渡邊甚吉邸の建築概要と関係人物相関

- 第1節 甚吉邸建築概要
- 第2節 甚吉邸を取り巻く人物
 - 第1項 渡邊甚吉 (わたなべ・じんきち / 1906-1972)
 - 第2項 遠藤健三 (えんどう・けんぞう / 1898-1992)
 - 第3項 山本拙郎 (やまもと・せつろう / 1891-1944)
 - 第4項 今和次郎 (こん・わじろう / 1888-1973)
 - 第5項 大日本土木株式会社社章懸賞にみる遠藤と今
 - 第6項 橋口信助 (はしぐち・しんすけ / 1870-1928)
- 第3節 小結

第3章 山本拙郎の住宅観

- 第1節 あめりか屋、住宅改良会、『住宅』
- 第2節 『住宅』にみる山本拙郎の分身
 - 第1項 麓哲彦、麓生、SY生、S生
 - 第2項 目白千登作
 - 第3項 拙新論争
- 第3節 先達の記述にみる拙郎の住宅観
- 第4節 『住宅』の図譜にみる拙郎の作風
- 第5節 小結

第4章 旧渡邊甚吉邸にみられる和洋設備設計の知識

- 第1節 『和洋設備設計の知識』概要
- 第2節 甚吉邸の和洋設備設計の知識
 - 第1項 敷地
 - 第2項 玄関
 - 第3項 廣間と階段
 - 第4項 居間の家具の撰擇
 - 第5項 食事室
 - 第6項 寝室
 - 第7項 浴室
 - 第8項 暖房設備
 - 第9項 窓
 - 第10項 小屋組
- 第3節 甚吉邸設計の参考文献からみる吹き抜けの所以
- 第4節 小結

第5章 旧渡邊甚吉邸の日本近代上流住宅史上の位置付け

- 第1節 甚吉邸の主屋外の事象
 - 第1項 甚吉邸の立地、そしてガレージ
 - 第2項 白金という立地
 - 第3項 敷地所有の変遷
- 第2節 甚吉邸の動線計画の公私区別
 - 第1項 屋内施錠からみる部屋の優位性
 - 第2項 西側階段からみる動線計画
- 第3節 復元考察
 - 第1項 居間—食堂間の暖炉
 - 第2項 食堂の白いぬりかべ
 - 第3項 窓金具の復元考察
- 第4節 甚吉邸に見られるユニークな建具装置
 - 第1項 化粧室便器傍の横長の穴について
 - 第2項 全ての窓に設置された網戸
 - 第3項 食堂廻り縁装飾の施工方法
- 第5節 甚吉邸の外部意匠の領域区別
 - 第1項 雨樋取り付け金具にみる区別
 - 第2項 窓配置にみる区別
 - 第3項 つかみ金具と窓配置からみる甚吉邸の日本近代上流住宅史上の位置付け
- 第6節 小結

第6章 結論

研究背景

研究対象である「旧渡邊甚吉邸」は1934(昭和9)年に現港区白金台に建てられたハーフティンバーを基調としたチューダー様式の邸宅であり、設計には「あめりか屋」の元技師長・山本拙郎、同元技師・遠藤健三、考現学者・今和次郎の3名が携わった史的意義の高い住宅である。この住宅の解体移築にあたって2017年度は「旧渡邊甚吉邸サポーターズ」による実測調査が行われ、2018年度は「旧渡邊甚吉邸解体保管検討委員会」により、実測調査と解体調査が行われている。



図1. 旧渡邊甚吉邸外観

研究目的

「甚吉邸の調査結果と設計者の言説を比較することで甚吉邸の住宅史上の位置付けを行い、その要因となった山本拙郎の設計姿勢の一端を明らかにすること」

既往研究と本研究の視座

甚吉邸を取り扱った既往研究は野村渉氏と政本悠紀氏の2本のみである。

- 野村渉 『旧渡邊甚吉邸に見る日本的プラグマティズム —近代日本建築との相克—』(2017年度 中谷礼仁研究室)
- 政本悠紀 『室内装飾の変遷と旧渡邊甚吉邸 —女性雑誌と三越家具部を中心として—』(2017年度 中谷礼仁研究室)

前者は設計者3名にみる「プラグマティズム」の概念に着目し、後者は三越家具部を中心とした室内装飾の変遷過程の一端として甚吉邸を扱っている。関連研究として内田青蔵氏のあめりか屋・山本拙郎の一連の研究があり、さらに山本拙郎本人による執筆記事が多数存在する。以上を踏まえ本研究では、先行研究では行われなかった設計者の言説を通じた甚吉邸の建築上の特徴に重きを置き、筆者が参加した実測期間(2018年10月22日-11月17日)と解体調査期間(2018年12月22日-2019年1月31日)で新たな発見の紹介とその考察を出来得る限り行う。その上で設計者との関連や住宅史の文脈の中での位置付けを行う。

論文構成

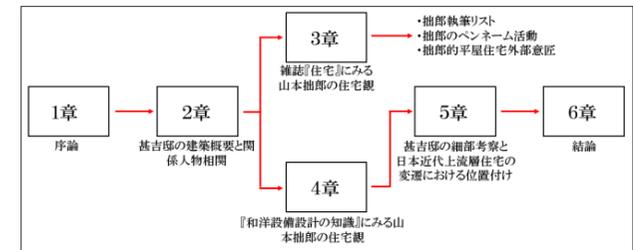


図2. 論文構成

第1・2章を経て、第3章『住宅』までと第4章『和洋設備設計の知識』から第6章結論までの二つの流れがある。『住宅』では本筋には接続はできないものの山本拙郎の新たな一面を発見している。『和洋設備設計の知識』からは山本拙郎の設計姿勢の集大成である本書の知識が甚吉邸にかなり反映されていることを示し、また本書および実測を通して甚吉邸を日本近代上流層住宅としての位置づけを行い結びとしている。

第1章

甚吉邸保存の発端と、移築保存に至るまでの先達の奔走を記載した。経済優先の現代に建築遺産が少しずつ失われている中で、阻止しようとする企業や学術団体の存在とその活動の記録の一端を残した。

第2章

既出の書籍や学術論文での言説を本論で扱う内容に即してまとめ直したものであるが、特に作品の少ない設計者達の実作表を作成し確認できたことで、如何に甚吉邸が貴重であるかそして残す事の史的意義を示せた。また、大日本土木株式会社社章懸賞という切り口で活動の性格が異なる遠藤健三や今和次郎の接点を新たに確認できた。関連人物相関図を作成する事で時代背景や同時期にそれぞれの活動の関連が一目でわかるようになった。

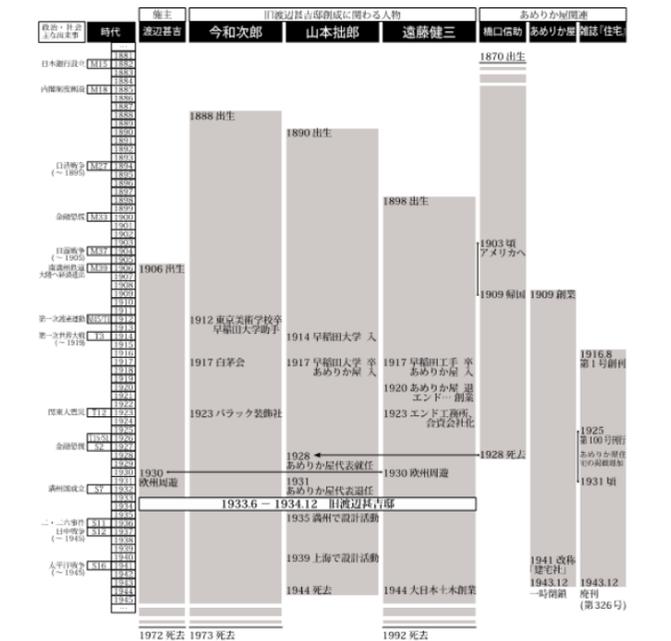


図3. 旧渡邊甚吉邸の関係人物相関図

第3章

拙郎本人による既述や、一連の研究や書籍における拙郎の言説をまとめた。その上で、これまでの設計態度について述べられてきた「拙郎風と呼べるような特徴はほとんど見られない」という言説に対し、雑誌『住宅』の山本の執筆記事や図譜から、山本風の一端を探った。作風の断言は、できないものの1922(大正11)年から1925(大正14)年の四年間の妻入りの平屋住宅という条件に限ると、「引き違い窓」「水平な化粧胴差を境に下部に下見板(横)張り」「玄関ポーチを支える一本の柱」の3つの特徴が露わになった。



図4. 『住宅』住宅図譜での拙郎による代表的な平屋住宅

既述の3つの特徴により、「池袋鈴木邸」と「渋谷・喜熨斗、吉岡邸」の山本拙郎の設計関与の可能性を示した。傾向把握の準備段階の産物として山本拙郎の記事における

「麓哲彦」「SY生」「麓生」「目白千登作」という名称でのペンネーム活動の事実を明示した。それに伴い『住宅』における山本拙郎執筆記事リストの最新版を作成した。

年月	記事名	小欄	図説
1919(大8)年7月号	中世の山荘建築		○
1921(大10)年1月号	名園の趣味住宅		○
1922(大11)年1月号	住宅図説/郊外住宅の著作		○
1922(大11)年2月号	住宅図説/郊外の小住宅		○
1922(大11)年3月号	住宅図説/あめりか屋式		○
1922(大11)年4月号	住宅図説/新らしき数寄屋好み		○
1922(大11)年5月号	文化村を見て		○
1922(大11)年6月号	住宅図説/テレスのある田舎家		○
	小住宅の文化設備		○
	住宅図説/郊外住宅		○
	小住宅著作(二十坪)	SY生	○
	日本の木造家は地震には安全		○
1922(大11)年7月号	住宅図説(7)/Pergola門のある家	麓哲彦	○
	南園の家(農家の研究者のために)		○
	アメリカから	SY生	○
1922(大11)年8月号	電力冷蔵庫		○
	住宅図説八/木立を後ろにした家		○
	新聞地風景	麓哲彦	○
1922(大11)年9月号	居間考		○

図5. 山本拙郎執筆『住宅』記事リスト(一部)

第4章

甚吉邸の竣工当時の古図面と拙郎唯一の建築設計単行本『和洋設備設計の知識』を比較する事で山本拙郎の理想と甚吉邸との驚異的な一致を発見し、甚吉邸が住宅作家の先駆者の理想が詰まった住宅作品である事を示した。

【和洋設備設計の知識に記載された理想とする設計原論】

- 敷地の配置と南方の庭
- サンルームと隣屋との距離
- 車の動線上の玄関ポーチ
- 全ての部屋へ接続する広間
- スタイルを持たない居間
- 東側の食事室
- 台所-配膳室-食事室
- 2階南側寝室とバルコニー
- 寝室ごとに設けた浴室

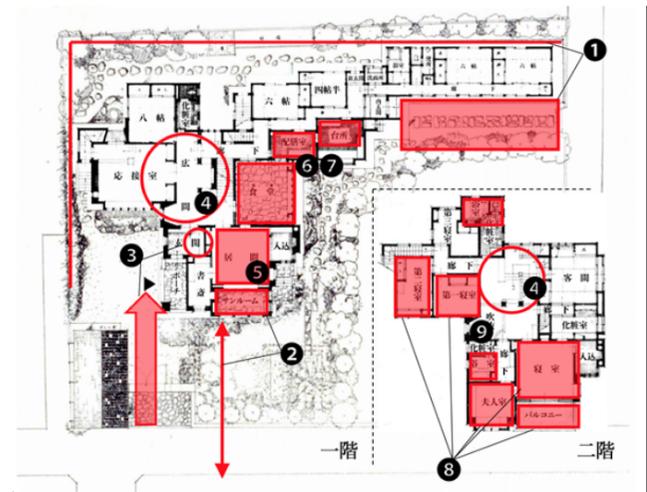


図6. 甚吉邸古図面にあらわれる和洋設備設計の知識

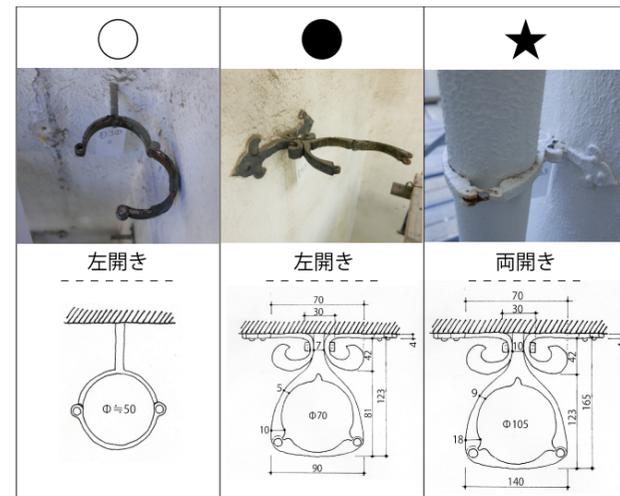
第5章

2018年度の甚吉邸の実測および解体調査から得た発見をもとに考察を行なった。大別すると以下の通りである。

- ① 甚吉邸の所有の変遷や古地図から見た外部環境の変遷をたどることによって得た「ガレージの意匠と配置計画理由」
- ② 各居室の施錠方向と、『渡辺甚吉邸竣工記念誌7』に寄せられた設計者2名の言説をもとに推測した「公私区別の動線計画」
- ③ 6種類ある開き窓金具の比較などによって最初期の用例を推測した「窓金具の復元考察」
- ④ 化粧室便器横の穴、食堂天井装飾、網戸とロールスクリーンの配置などについて「甚吉邸に見られるユニークな建具」と題した施工方法や用途の考察
- ⑤ 各方角立面、雨樋金具と窓(上下と引き違い)の種類分布の分析による「平面計画にみられる洋・和館区分」

このうち⑤の考察内容をもとに史的位置付けを行った。本レジュメでは特に雨樋金具の考察だけに着目して記載する。

甚吉邸の雨樋のつかみ金具には当初材と考えられるものだけで3種類ある。以下に○・●・★に分け、【図7】形状比較と【図8】位置関係を提示する。



↑図7. つかみ金具の種類

図8. → 雨樋・つかみ金具の配置を示した屋根伏せ図(右上の細線の屋根は平屋部分)

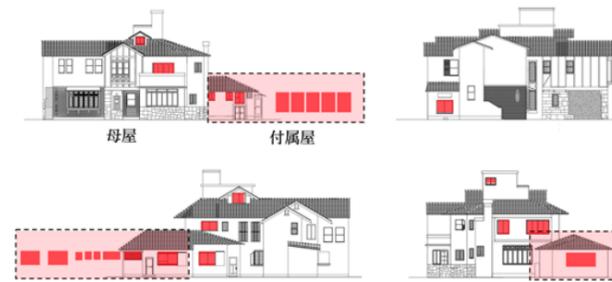
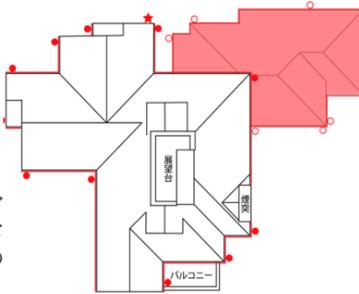


図9. つかみ金具と窓配置による甚吉邸の母屋・付属屋分類

つかみ金具の装飾の有無の分類と窓の区別(本論参照)から、一見して一棟の住宅に見える甚吉邸が【図9】のように母屋と付属屋に分けた設計がなされていたことが浮かび上がる。

さて甚吉邸のような上流層住宅の中で、あめりか屋住宅史上で母屋-付属屋と分けて設計された住宅は二つあり、旧和田豊治邸と旧川上貞奴邸である。この二棟が考慮された内田青蔵氏の定説する上流住宅の変遷史に甚吉邸を組み込むと、【図10】のような位置づけとなる。

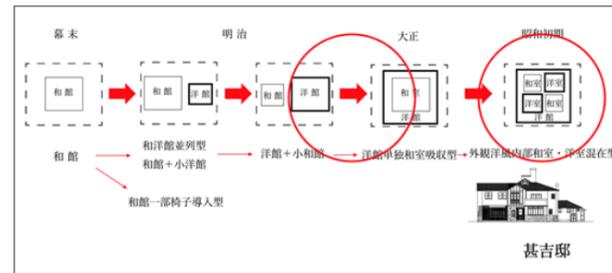


図10. 甚吉邸の日本近代上流住宅史上の位置付け

甚吉邸は洋館単独和室吸収型住宅形式へ移行した後の昭和の時代に、明治から大正へ移行する過渡期の形式(和田邸や川上邸などの形式)を、関東大震災後の外壁の制約を踏まえた上で、再び用いていた。それは「二階建て部分の主屋では日常生活、平屋に主屋の生活を支える使用人の場が集約された付属屋」という機能分化のために、明治から大正へ移行する過渡期の形式リバイバルと言え、日本近代上流住宅史上の新たな位置付けである。

第6章

以上を踏まえた結論として、まず各章に甚吉邸・山本拙郎にまつわる新規の情報を記載した。甚吉邸の調査結果と設計者の言説を比較することで甚吉邸の住宅史上の位置付けを行った。そして旧渡辺甚吉邸の実測調査結果と山本拙郎の言説を比較し、甚吉邸が山本拙郎の理想の体現であることを明示し、山本拙郎の設計姿勢の一端を明らかにした。

図版出典/注釈

- 図1: 野村渉『旧渡辺甚吉邸に見る日本的プラグマティズム-近代日本建築との相克-』(2017) 付録
 図2: 筆者作成
 図3: 筆者作成
 【今和次郎】欄は、野村渉『旧渡辺甚吉邸に見る日本的プラグマティズム-近代日本建築との相克-』(2017)、【山本拙郎】欄は、知野俊文『山本拙郎の住宅観とその影響について』(2008)【遠藤健三】欄は、今和次郎欄と同じ。
 【あめりか屋】欄は、内田青蔵『わが国戦前期の住宅専門会社「あめりか屋」に関する総合的研究』、【建築界の変化】欄は、稲垣栄三『日本の近代建築史-その成立過程』(丸善、1959)、【近代日本住宅中・上流階級】欄は、内田青蔵『わが国の住宅近代化に関する一連の歴史研究』(2017) 学内発表スライドを参照のもと作成した。
 図4: 『住宅』1922年1月号 郊外住宅の習作
 図5: 筆者作成
 図6: 筆者作成
 図7: 筆者作成
 図8: 筆者作成
 図9: 筆者作成
 図10: 『中山別荘(旧和田別荘)物語』P.34をもとに筆者作成

参考文献

- 旧渡辺甚吉邸について
 1. 合資会社エント建築工務所東京支店『渡邊邸』(九段寫真研究所、1932)
 2. 新建築『日本の建築家』(新建築社、1981.12)
 3. 『季刊銀花 58号』(文化学園文化出版局、1984)
 4. 藤森照信『建築探偵の冒険 東京編』(筑摩書房、1986)
 5. 日本建築学会『総覧 日本の建築3 東京』(日本建築学会、1987)
 6. 建築文化『近代日本、建築家の足跡 デザイナーとしての今和次郎』(彰国社、1990.2)
 7. 東京都教育庁生涯学習文化課『東京の近代洋風建築(第2次)調査報告』(東京都教育委員会、1991)
 8. 阿木香、日野永一、新見隆、山本正之、伊奈 英次『日本タイル博物誌』(INAX、1991)
 9. 内田青蔵『拙先生絵日記』(住まいの図書館出版局、1993)
 10. 凱風舎編『日本の建築・土木ドローイングの世界』(大成建設、1997)
 11. 畑中章宏、森かおる編『今和次郎 採集講義』(青幻舎、2011)
 12. 岐阜新聞 2013年5月14日 火曜日 百折不撓ぎる財界人列伝 渡辺甚吉(下)
 13. 日本経済新聞 2015年9月17日 夕刊文化 藤森照信 4
 14. 野村渉『旧渡辺甚吉邸に見る日本的プラグマティズム-近代日本建築との相克-』(2017年度早稲田大学中谷礼仁研究室)
 15. 政本悠紀『室内装飾の変遷と旧渡辺甚吉邸-女性雑誌と三越家具部を中心として-』(2017年度早稲田大学中谷礼仁研究室)
 16. 日本経済新聞 2018年12月23日 17面 「美の粹」
 17. 『TUDOR HOMES OF ENGLAND』(1929, Architectural Book Publishing Company, New York)
 18. 下村正太郎『中道軒の内外』(1932, 京都: 下村正太郎)
 ■今和次郎について(本論参照)
 ■遠藤健三について(本論参照)
 ■あめりか屋について(本論参照)
 ■便所について(本論参照)
 ■山本拙郎について
 内田青蔵 編『住宅建築文献集成 第5巻 和洋住宅設備設計の知識』(2009, 柏書房)
 42. 長谷川光『都市回廊』(1975, 相模書房)
 43. 『日本の建築家(新建築1981.12月号臨時増刊号)』(1981, 新建築)
 44. 内田青蔵『山本拙郎の住宅観と所謂「拙新論争」について』(1986, 日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.755-756)
 45. 藤森照信『日本最初の住宅作家』『昭和住宅物語』(新建築社、1990)
 46. 内田青蔵『日本の近代住宅』(1992, 鹿島出版会)
 47. 見城 美枝子、川添 登、中川 武、米山 勇『白鳥義三郎・山本拙郎の住宅論争について: 日本近代建築史における「早稲田建築」と住居学の系譜-2』(1997, 日本建築学会計画系論文集 pp.53-54)
 48. 井上祐一、初田亨、内田青蔵『大正・昭和初期における、いわゆる「ライト式」の用語の使用について』(2003, 日本建築学会計画系論文集 pp.137-142)
 49. 知野俊文『山本拙郎の住宅観とその影響について』(2008年度早稲田大学建築史研究室)
 50-102. 内田青蔵『雑誌「住宅」復刻版』(第1期)2001~[第6期]2003, 柏書房) 第1巻~第52巻 ※ただし、第1巻(1916年1月-1917年12月)は解題のみ、飛んで第5巻(1920年1月-6月)から第29巻(1932年1月-6月)は山本拙郎(ペンネームの麓哲彦、目白千登作、SY生、S生)が執筆した記事を中心にめくって参照した。また、第2巻(1918年1月-12月)から第4巻(1919年7月-12月)、第30巻(1932年7月-12月)から第52巻(1943年7月-12月)は山本拙郎及び本人のペンネームで執筆したものがないかの確認のため目次のみの参照にとどまる。